

赤い糸で、 海と陸をつなぐ

【特集】五十嵐靖晃 《海渡り》

津奈木町は1984年からアートによるまちづくりを進めています。アートを媒体に對話を重ね、これまでその土地でしかつくりえない作品を生み出してきました。今回の舞台は、赤崎地区にある小さな島「弁天島」。潮の満ち引きによって渡ることができるその島には、町を見守るように佇む弁天神がいます。数十年たった一人で管理を続けてきた松田テル子さん（日当）。自身を「最後の代になるかもしれない」と語ります。

アーティストの五十嵐靖晃さんが4年におよぶりサーチと對話によって、昨年完成した《海渡り》。人々が紡いできた地域の営みを、海と陸をつなぐ無数の糸で表しました。

今回の特集では、アーティスト、町、住民が向き合い、後世に受け継いでいくことを目指した、新しい私たちのアート作品の裏側をひも解きます。



住民と対話を重ねる五十嵐さん



松田さんにお祭りの思いを聞く



制作実験で自ら糸を引っ張る

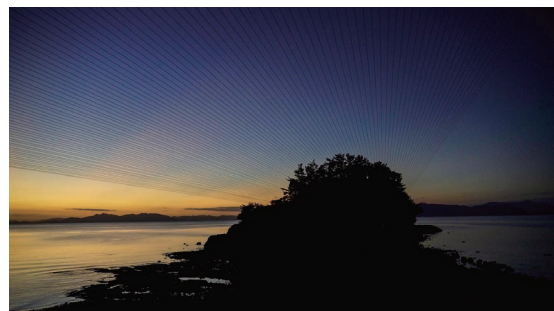
天様のまなざしを感じました。私は「海からの視点」というものを大切にしている、ふだん陸で考えている感覚とは違う海からの視点で物事を考え、自分たちの暮らしや生き方を見つめ直す。それは、自らの視線を弁天様のまなざしと重ねることでもあります。

祈りを重ねられていた松田さんが、お祭りを続ける最後の1人になるかもしれない。お祭りを次の世代につなぎたい。松田さんとの出会いが、「この町で納めるべきもの」が見えた瞬間でした。

島と陸をつなぐ赤い糸

《海渡り》ではみんなで海を渡って糸を張る日を「海渡りの日」としました。糸は「弁天様のまなざし」であり「海からの視点」を表現しています。また、松田さんよりずっと前の世代から考えると、多くの人が祈りのために島に渡っていて、その「歩みの軌跡」のイメージでもあります。

プロジェクトが進むにつれ、一緒に作る仲間が増え、みんなが「自分事」として関わってくれたように感じました。島では、強い力をかけて糸を固定する必要があります。そのため、競舟チーム「津奈木海龍」の若い漕ぎ手たちが力いっぱい引き寄せ、それを熟年の漁師である林田廣美さん（日添）が慣れた手つきで支柱に結び付ける。昼食は地元のお母さんが心を込めて作ったおにぎりと豚汁。みんながそれぞれの力を生かしながら《海渡り》が完成したと思います。



日が暮れると日中とは違った美しさを楽しめる

《海渡り》の制作風景を紹介する映像を公開

つなぎ美術館 YouTube チャンネルで、《海渡り》の映像を公開しています。右 QR コードを読み取ってください。



【URL】https://www.youtube.com/watch?v=08nY-i_3HWA



つなぎまちのつなぎかた

「海渡りの日」は言葉通り海を渡る日でもあるし、海から自分のことを、暮らしを、この自然との向き合い方を見つめ直す日でもあります。来年は町の文化の柱の1つである競舟の乗船体験ができる機会を設けたいです。

《海渡り》を通して、子どもからお年寄りまで世代を超えて地域の方々がつながる機会になったように感じます。津奈木の海と関わりながら命をつないできた文化

がさまざまなところに散りばめられていて、みんなでそういう場を創り上げることができたと思います。この《海渡り》が津奈木の人たちの心のよりどころになればうれしいです。



組みひもワークショップで児童に組みひも方を指導

住民参加のアートプロジェクトで人と地域をつなぐ架け橋に――

津奈木に「新しい海の日」を――

《海渡り》の発案者であるアーティスト・五十嵐靖晃さんが大事にするのは、「土地の声を聞く」こと。リサーチする中で、弁天様の存在や祭りを長年1人で行っているという事実を知り、作品のイメージが浮かび上がったそうです。作品への思いや人と地域をつなぐアート活動を聞きました。

五十嵐 靖晃さん

いがらし やすあき／アーティスト

1978年千葉県生まれ。東京藝術大学大学院修士課程修了。人々との協働を通じて、その土地の暮らしと自然とを美しく接続させ、景色をつくり変えるような表現活動を各地で展開。アートとは自然と人間の関わり方の術であり、この時代、多様な人々をつなげるものとしてあると考える。2005年にヨットで日本からミクロネシアまで約4000kmを航海した経験から「海からの視座」を活動の根拠とする。津奈木町では海の上にある廃校を拠点にしたアートプロジェクト「赤崎水曜日郵便局」（2013～16）の企画運営にも携わった。

2018年につなぎ美術館から地域に根ざし、継続できるプロジェクトの依頼を受けました。リサーチに訪れたのが町の水源地。そこには水の神様が祭られていて、水源近くから海が見えたことが強く印象に残りました。水の流れの行き着く先に海と島があり、そこには水難から人々を守ってくれる弁天様がいて、「水」というテーマが私の中で浮かび上がりました。山から水を追いかけて海へと下り、そこで弁天島に出会ったのでした。

たった一人で執り行ってきたお祭り

弁天島には祠があり、松田テル子さんが一人で島を管理されていると聞きました。その中で出てきたのが「弁天様のお祭り」の話。数十年前で「お祭りをされていて、そのときに「津奈木の町をお守りください」と毎年お祈りしてください」ということを知りました。

弁天様は町を見守るように見えて、そこにいると弁



島と陸をつなぐ、

無数の赤い糸

五十嵐靖晃 《海渡り》

100人を超える参加者が集まった《海渡り》。
9/23(金)に開かれたこの日の様子をお届けします。

9月23日(金)、五十嵐靖晃
アートプロジェクト「つなぎ
まちのつなぎかた」で展示す
る作品《海渡り》の制作が旧

赤崎小学校近くで開かれまし
た。参加者は弁天島と陸をつ
なぐ102本の糸を張ってい
きました。糸は弁天様のまな
ざしと海からの視点を表現。
そしてまた、島を往来する
人々の歩みの軌跡を糸に乗せ
てかたちにしています。
最後の102本目の糸は全
員で島へも運んでいきまし
た。五十嵐さんは「みんな
で1本持つていくときに、祈り
の道をたどっているように見
えた《海渡り》を通じて、
この土地でずっと続いてきた
お祭りをアートの力で継承し
ていく新しい形を作りたいか
つ」と話していました。

弁天様のお祭りを続けてきた
松田テル子さん(左)

1.《海渡り》を背景にみんなで記念撮影／2.号令をかける五十嵐さん／3.弁天島
から見た《海渡り》／4.地元のお母さんたちによる豚汁やおにぎりのふるまい／
5.糸を引き寄せてしっかりと固定／6.最後の糸は参加者全員でつないだ／7.参
加者たちが陸から島に糸を運ぶ／8.力強く糸を引く競舟チームの津奈本龍



1.2. 糸が水に濡れないように巻き上げる／3. 辺りが暗くなる中、鳥居を建立。ことしは鳥居の裏面に地域住民が文字入れをした

10月21日(金) 弁天様のお祭り 島へ渡り、津奈木の無事を祈る

「弁天様のお祭り」は旧暦9月26日、弁天島が陸続きになる干潮時に開かれています。昔は松田家と千々岩家で祭りを続けていましたが、次第に1人でするようになりました。

古くから伝えられてきた作法にのっとり、旗を揚げ、赤飯やお神酒、みかんなどを奉納。みんなで手を合わせ津奈木町の未来を祈りました。松田さんは「1人で続けるのは大変だったので、皆さんが参加してくれてありがたい。きっと先祖や弁天様も喜んでくれると思う」と感謝の気持ちを伝えていました。

陸へ戻るとテーブルを囲んで直会が開かれました。煮しめやえびめし、ひじきや豆腐などを丸めて揚げた「ヒロス」など、地元のお母さんたちが作ったごちそうに舌鼓を打ちました。かつて弁天島で遊んでいた話や海辺でビナを拾った話など、昔の風景に思いをはせました。古くからお祭りは過去と現在をつなぐ役割も担っていたかもしれません。

10月16日(日) 糸あげの日 糸を引き上げ、鳥居を元に戻す

展示した《海渡り》の赤い糸を引き上げ、鳥居を元に戻す「糸あげの日」が開かれました。参加者約30人は島から陸へと糸を濡らさぬよう丁寧に巻き上げていきました。102本あった糸は無事に回収され、綺麗に手入れされた鳥居が島へと戻されました。

この鳥居は約20年前に台風で倒壊したままとなっていたが、プロジェクトが進むにつれて「鳥居を建て直したい」という地域の強い思いから、地元大工さんの協力を得て昨年再建されたものです。ことしは地域住民の手によって新たに奉納の文字が入られました。

参加者からは、鳥居のある元の姿に戻ったことへの喜びと、これまで見てきた島の風景が不思議と新しい風景に感じると声が上がっていました。五十嵐さんは「《海渡り》を通して、自然との関わりや自分自身を見つめ直すことで、懐かしい風景が新しく感じたのかもしれない」と話していました。



1. お神酒や果物などをお供えをしてお祈り／2. 急斜面を慎重に登る／3. 海辺のシェルターで地元のお母さんが作った手料理で直会



旧赤崎小学校で津奈木小学校3年生42人が、日本伝統の技法である「組みひも」を体験し、ブレスレットを作りました。講師を務めたのは、事前にレクチャーを受けた保護者を中心。この日のために準備を進めてきました。児童たちは教えてもらいながら上手に手を動かし組み上げていきました。



コツをつかんできれいに組み上げていく児童

ときに今日のことを思い出してほしい。いつか組みひもで100歳の糸を作り、《海渡り》の糸として張るのが目標」と話していました。



事前に組み方を学ぶ講師



海や弁天島、《海渡り》を描く



作ったブレスレットをみんなで見せ合う

未来へつなぐ糸を、
みんなの手で――

10月7日(金) 津奈木小学校組みひもワークショップ

弁天様のまなざしを、 未来につなぐ――

五十嵐さんが「津奈木を大切に思うみんなの気持ちが形になった」と話すように、《海渡り》は多くの人が協力して完成しました。糸を張る人、力強く引き寄せる人、柱に結びつける人、料理で支える人―。それぞれが違う作業を担いながらも、そこには笑顔が広がっていました。参加者に話を聞くと、地域への思いがあふれていました。



みんなで作り上げた《海渡り》
ずっと続くとよかね――

林田 廣美さん（日添）

生まれも育ちも津奈木町ですが、弁天様のお祭りは全然知らなかったです。小学生のころから、ずっとこのほころは何なのか気になっていました。

私が弁天島で糸を結んでいるときも、ちゃんとできているのか心配でしたが、学校側から見たらきれいに張られていて感動しました。

五十嵐さんとは「赤崎水曜日郵便局」から9年以上の知り合い。海の上の学校や島などを使って作品を作ってもらい、《海渡り》がきっかけでここにあった鳥居や昔の祭りを思い出させてくれて感謝しています。祭りや《海渡り》に関わる人が増えていけるよう、一緒に私もできる限りお手伝いしたいです。



これからの人生の
支えになる貴重な経験――

森本 祐宇さん・梁介さん（丸岡）

昨年、お父さんから誘われて楽しかったので今回も参加しました。私たちの役割は、糸をつなぐために、引っ張りながら運ぶこと。早く完成したところが見たいとワクワクしながら頑張りました。最後の糸を持っていたのが印象に残っていて、みんなで作り上げた《海渡り》はとてもきれいでした。

休憩中に食べた豚汁が特においしく、たくさんおかわりしました。磯遊びではエビの赤ちゃんがいたから、えさになりそうなものを探したりと、忘れられない思い出となりました。

《海渡り》を通じて、みんなで協力することの大切さを学びました。来年からもぜひ参加したいです。



喜ばれることを想像しながら
楽しく料理しとるよ――

岩崎 美津子さん（日添）

昔は冠婚葬祭や行事には地区のみんなが参加し、そういうときには婦人会が約100人分の料理を作ります。私も嫁いできてから先輩方に地元の料理を教わりました。《海渡り》制作当日に豚汁やおにぎり、昔からお祭りのときに食べていた煮しめなどを弁天様のお祭りの直会でふるまいました。おいしそうに食べる姿を見ると、私までいやされ、幸せを感じます。

みんなで会話しながら料理を作るのも楽しみの一つです。何十年先までもは頑張れないけど、大好きなふるさとの味が残ってほしいというのは同じだと思います。元気なうちに次の世代に作り方や味を伝えていきたいです。

※直会…神事の最後にご飯やお酒などを飲食すること。



伝統の継承をみんなで
考えるきっかけに――

新立 誠さん（丸岡）

《海渡り》では島で糸を引いたり、鳥居の柱を運んだりと力仕事を任せられました。ふだんとは違う視点で海に関われることにすごく新鮮味があって、心を打たれました。

私は競舟チーム「津奈木海龍」に所属し、13歳からこぎ続け、海と共に育ってきました。台風や新型コロナウイルスの影響などで競舟大会が平成29年から中止が続き、最近では子どもと海との距離が少し遠くなったように感じます。弁天様のお祭りも競舟も次世代へ継承していくべき町の文化です。《海渡り》もいつまでも続く伝統行事になってほしいし、競舟の乗船体験などを通して、子どもが海と触れ合えるような機会と一緒に作っていきたいです。

「ふだん陸で考えている感覚とは、違う海からの視点で物事を考え、自分たちの暮らしや生き方を見つめ直す―」。

五十嵐さんが語った、

《海渡り》に込められた思いです。

多くの人々との対話によって

この作品が生まれました。

弁天様の話を聞いた日、

みんなで初めて弁天様と

まなざしを重ねたとき、

競舟チームの思いを聞き、

郷土料理を作るお母さんたちの

料理を食べたとき――。

たくさんの人との

つながりが深まる《海渡り》は

こんな時代だからこそ、

大切にしなければなりません。

これからも《海渡り》は

津奈木の「新しい海の日」として

地域内外の人々の手により、

伝統や地域を大切に思い、

守ってきた人々の願いと共に、

次の世代へと引き継がれて

いくことでしょう。

【特集】赤い糸で、海と陸をつなぐ（完）――

自然と人をつなぎ、過去と未来をつなぐ――

新たな伝統を紡ぎ、
未来を開いていく――